

## はじめに

誰にも、懐かしい思い出の歌があるだろう。また、日頃愛唱する歌があるだろう。「戦前生まれの戦後育ち」の私にとっては、それはもつぱら、「リンゴの歌」に始まる戦後歌謡曲、それもとりわけ演歌調の歌ということになる。中学時代の「啼くな小鳩よ」、高校時代の「雪の降る街を」、大学時代の「有楽町で逢いましょう」……などなど、口ずさめばはや、折々の出来事、行き交いし人々がほのぼのと浮かび、しみじみと思い偲ばれる。

最近、さる情報誌に「たかが演歌、されど演歌」なるテーマで、思い出の歌にことよせたエッセイをいくつか書いた。だが、書くほどに往時が偲ばれ、ときには、不覚にも涙がこぼれることさえあった。思えば、戦後日本の復興とともに大きな国民歌謡にまで高まつた演歌・歌謡曲は、当時の日本人の精神的支柱のひとつでもあった。終戦直後は小学生、すぐに春思う年頃に入った私は、その歌謡曲に琴線を弾かれ、そのまま、「歌は世につれ人につれ」ならぬ、「世につれ歌につれ」て長じてきた。得意のときもしかり、友に去られ、恋を失い、目標を無くして失意のときなどは、どんなにか、口ずさむ歌の数々に励まされ、また慰められてきたことか。これはしかし、ひとり私だけのことではなく、とりたてて非凡ならざる私

たちにとつては、それほど特異なことではないだろう。なかでも、戦中戦後に苦難の青春を送つた世代には、格別当たるのではなからうか。

当初は、いかにもエッセイらしい毎回読み切りの内容を予定した。が、二、三話書くうちに、いつのまにやら、歌にことよせたわが人生の回想譜とはなつてしまった。編集子にはたいへん申し訳ないと思いつつも、ことほど左様にこれも致し方のないことよ、と妙な納得を以て書き終えた。ところが、終えてなんとも腹膨るる思い。思い出の歌はあまりに多く、それから後というものは、一杯きこしめしたときや湯船につかつているときは言わずもがな、散歩・散策などの遊休時はもちろんのこと、読書・執筆などの研究・仕事中でさえ、あろうことが、いつか鼻唄まじりに唄つて、往時を追懐しているのである。

かりそめのエッセイが事始めとなり、止みがたく、歌つれづれに來し方が偲ばれる。ままよそれなら、いつそ思い出すま、來し方を辿つてみたら……。そんな、絶とうにも絶ちがたい回想の思いを歌に託した気候なエッセイ、しばしまどろみ歌いつつ、書き綴つてみよう。